

1997年から2001年にかけての論争 (2)

齊 藤 泰 治

1. 自由主義をめぐる

中国で問題にされている自由主義にせよ、新左派にせよ、それらの主張を整理することは不可欠である。だが、これは実際には難しい作業である。論者によってその意味するところがずれているからである。それは、自由主義そのものの発展の歴史をどのように認識し、発展の過程のどの部分に自由主義の本質を見出すか、という問題と、そのような発展過程と現在の中国に対する認識とをどのように結びつけるかという問題について、論者によってかなり開きがあることによる。そこで、まず自由主義について、どの程度の「広がり」をもつのか、表題に示した時期に発表された諸説を紹介することとしたい。

古典自由主義をいかに定義するかは大きな問題だが、「古典自由主義は理論的徹底性をもち」、「①天賦人権から来る個人の自由、それは神聖にして犯すべからざる性質をもつ、②権力の自己膨張に対する警戒から、政府の権力を人びとが同意する限度内に絶えず限定せざるを得ない」⁽¹⁾という任劍濤の定義を一つの例として示すことができる。古典自由主義に遡って自由主義を説くことは中国の現実との距離を考えると、問題によっては本質的に「急進的」視点となる場合が少なくない。少なくとも潜在的「急進性」を帯びているといっていよい。

自由主義的立場に理解を示す論者でも自由至上主義とは一線を画することが多く、現実社会との関係から、抑制を効かせた主張が少なくない。新左派は自由主義批判を展開する際に、「自由至上」に批判の矛先を向けている。

「放任」を抑制した自由主義を「新自由主義」と見なすものがある。この「新自由主義」とは20世紀前半中国で「自由主義的社會主義」とされていた思潮と

共通性をもつといえる。自由放任を批判する新自由主義に関しては、徐友漁は「自由主義の第二の大きな調節」としてT.H.グリーン、J.A.ホブソン、L.T.ホブハウス、J.M.ケインズらを代表とする「新自由主義」あるいは「社会自由主義」として紹介している⁽²⁾。新自由主義に関しては、公平をめぐって古典自由主義との比較が一部論者によってなされている。

このような自由主義の展開を社会主義との関連でどのようにとらえるか。譲歩と見なすのか包容性を示すものと見なすのか。徐友漁は「資本主義社会内部に分配不公正、福祉低下、経済不況等の問題が現れ、社会主義運動の強烈な衝撃の反省から出発し、新型の自由主義は古典自由主義の個人主義原則に修正を加え、個人と社会の間に結合と均衡をさがし求めるよう提唱した。それは経済に対する放任主義的立場を放棄し、国家が積極的に経済に関与する運営を主張し、階級協力と社会改良につとめ、労働者に対する福利待遇を増加させた」⁽³⁾と述べ、「自由主義のこの内容の更新は国家独占権力と資源配分、計画経済体制を実行する社会主義原則への譲歩を表しているのではなく、その包容性と適用性を示している」⁽⁴⁾と評している。

自由主義をめぐる基本問題に関して甘陽は、「実際は、『自由主義』はしばしばまったく異なる、相反する主張、傾向を指すのに用いられる」と述べ、「アメリカでは19世紀後半は主として『自由放任の自由主義』を指したが、ルーズベルト以降、逆転して『自由放任自由主義』に対する批判、転覆を意味するようになった。市場は国家と社会の力によって規範化、調節しなければならず、『自由放任』に任せることはできないと強調した」⁽⁵⁾と記述する。

「新政自由主義」のその後の展開も踏まえ、任蹟はその基本理念を次のようにまとめている。「(1)私有制の市場メカニズムを肯定し、この基礎の上に積極的自由主義による国家関与を主張する、(2)ロールズを代表とし、順序立った法治の自由権を肯定、センを代表とし、「実質自由」(あるいは「能力自由」)により自由の目標を「法権の自由」を超越する領域にまで拡大する。個人の自由、公平を核心とする法治を堅持する、(3)民主を堅持し、個人の自由を侵犯

する専制／集権／権威主義政権に反対、階級あるいはその他の集団を基礎とする「民主」に反対する(4)「機会の平等」を堅持、社会が「結果の平等」責任を担うことを否認し、集中計画に反対する」⁽⁶⁾。

自由主義をめぐるこれらの歴史上の展開のどの部分をとらえて自由主義とするのか、論者によって違いはあるが、自由主義をめぐる論争の中で自由主義の代表的見解として理解されていたのは漠然とした古典自由主義であり、批判も主としてここに集中していたということができる。

自由主義はさまざまな問題への対応を通して展開を見せてきた。それぞれがそれぞれの自由主義のイメージで語り、自由主義のどの部分にそれぞれの意義を見出すとしても、現在の中国でこの問題を語る場合の基本的な前提がある。

自由主義については、「歴史的に不足していた要素」という視点からこれを論じることができる。1949年以降のみならず、100年の射程で考えてみても、中国の「自由主義の伝統」が西洋思想と距離をもっていた、あるいは異質であったことはいうまでもない。

経済面に関してだが、李沢厚は現在の状況に対して「今日、現代自由主義各派（とくに自由主義左派）の経済理論の助けを借りて改善を加える必要がある」⁽⁷⁾と述べているが、このような見解も自由主義理論を活用する可能性に言及していると見ることでよい。

現時点の中国はこれらの理論を受け入れる場合、どのような評価が可能であるか。「中国の経済発展水準は半世紀前より大々的に進歩し、文化条件も変わり、自由主義を含む西洋的政治文化思潮に対する中国知識界の理解も前人を大きく超え」⁽⁸⁾ている。「中国はすでに列強の侵略と圧迫から脱却し、救亡の難題は解決している」⁽⁹⁾と現状を把握するとすれば、自由主義を今日の中国において再評価する必要が出てくるといえるだろう。

このことを考えると、改革開放後に自由主義思潮が浮上し、旧来の専制批判の作用が浮かび上がったとしてもそれは理解できることである。そして、こ

の方向が従来の不足を補うという限定的な動きを超えた時点で（体制側から見ると「逸脱した時点で」）、体制との摩擦が生じうることも理解できることである。自由主義の内実を語っている分には「問題」はないが、それと現実とのかわりを論じる時点で緊張が生じうるのである。

改革開放以後、80年代全般、さらには90年代を通じて、中国において旧来からさまざまな束縛の要因となっていた諸要素を解放する過程で、自由主義思想の強調は従来の理論の不足を確認する意味においても、一定の役割を果たしていたはずである。しかし、その理念から現実を映し出し、補足を超える意味で批判が提起された場合に体制がどのように反応するか、予断を許さない側面があった。

しかし、自由放任主義的傾向ではなく、社会民主主義的方向との接近等も視野に入れた新政自由主義的主張は、従来の先入観に支配されていた層からも、再評価がなされる可能性はあるかもしれない。

このような側面から見た場合、実はこの論争は自由主義のどの面を強調するかという相をもっていると考えられることもできる。論争の双方を「自由右派」と「自由左派」に分けた甘陽は、自由主義対新左派とは、実は自由主義内部の論争なのではないかと考えたのかもしれない。実はこの甘陽の「自由左派対自由右派」という対立軸の設定はそれまでの「自由主義対新左派」の枠組みに対する批判的な問題提起だったといえる。なぜ「自由左派」と「自由右派」のような概念を持ち出したのか。

それは第一には、90年代半ばまで共通の知的基盤に依拠していたことを踏まえてのことと思われ、その共通の基盤として「自由」を確認することは、あたかもアメリカにおける自由主義と保守主義のごとくとらえられるのではないかと、との問題提起も根本にありそうである。甘陽は、「90年代の論争は伝統的マルクス・レーニン主義と自由主義間の論争でも、伝統的社会主義と資本主義の論争でもなく、現代西洋の自由主義と保守主義間の論争により多く及んでいる」、「多くの自称『自由派』は現代西洋保守主義で、彼らが批判する『新左派』

は現代西洋自由主義である」⁽¹⁰⁾と述べている。

第二には、直接的な「左派」ではないとする認識の問題がある。甘陽は99年の香港でのシンポジウムで中国の新左派は「中国自由左派」と呼ぶべきものと提起した。(1)新左派は90年代中国自由派知識分子の分化による産物であり、(2)自由左派の主要な傾向は現代アメリカのいわゆる「自由派」に近く、自由右派の主要な傾向はアメリカのいわゆる「保守派」に近い⁽¹¹⁾、と指摘した。

このように見てくると、自由主義を検討する中で、中国では保守主義をいかに認識してきたかという問題も検討する必要が出てくる。ただし、中国では「保守思想」は伝統文化との関係で論じられてきたが、「保守主義」は外来の思潮であって、これまであまり論じられてこなかった。中国における「保守派」、「保守主義」とはそれぞれどのようなものなのか。自由主義と保守主義の間の諸問題を中国に当てはめて考えることの有効性はあるのだろうか。秦暉が「西洋の自由主義」は「欧州では自由主義といい、アメリカでは保守主義という。アメリカの主流の学術用語の保守主義は欧州の用法と異なり、アメリカの保守主義は欧州の自由主義である」⁽¹²⁾との基本理解を示しているのは、一般にこの問題に対する理解が中国においてあまり浸透していないことを意識しているためであるかもしれない。

劉軍寧によれば、「保守主義はかなりの程度、伝統主義に古典自由主義を加えたもの」であり、「保守主義と分岐が大きいのは、主として強い構造型理性主義傾向をもつ自由主義である」⁽¹³⁾。劉はさらに、「保守主義の実質は自由主義であり、自由主義と伝統主義の結合である」、「パークが打ち立てた保守主義は自由に対する親和的な制度を保守し、自由に対する友好的伝統を保守するものである」、「現代の新保守主義は古典自由主義と保守主義の高度な融合である。新保守主義は古典自由主義の大きな伝統を保守し、旧保守主義は自由の伝統を否定する急進主義に反対する」等保守主義を紹介している⁽¹⁴⁾。

「保守」をめぐる中国で最大の問題は、保守派と保守主義の関係であろう。

「保守派と保守主義は時として区別が難しい。両者はともに保守を重んじるが、前者には一定の原則がなく、後者には一定の原則がある。後者は特定な類型の既定秩序、すなわち自由精神に合致した自由秩序だけ保守する」⁽¹⁵⁾といった認識は、中国においてはまさに外来思想であろう。

劉軍寧によれば、「中国近現代の『保守主義』は実際には守旧思想であり、まるで保守主義ではない」⁽¹⁶⁾のであり、中国の保守派は「旧伝統を保守」、「改革を拒絶」、「自由を尊重しない旧制度を保守」を特徴とする。「無条件な集権と政治権威」が結果的に重視される。これは「自由の伝統のみ保守」し、「漸進的改革を主張」、「個人の自由を十分尊重する新制度」、「自由主義を増進できる新制度と有限政府」、「財産権、自由権、法治、憲政重視」の保守主義とは大きく異なる⁽¹⁷⁾。中国においては一般論としての「保守」であり、政治的概念ではあっても、政治学的概念ではない。

「自由左派」と「自由右派」の対立ととらえるかどうかとは別として、自由と平等を古典自由主義の2つの要素として認識し、「自由と平等のいずれが第一かという緊張が日増しに顕かになり、そこから自由至上論と平等主義の二大陣容が生まれた」⁽¹⁸⁾と考えれば、「自由主義対新左派」の構図そのものが再検討の対象となりうることを示しているといえないか。つまり、「自由主義対新左派」ではなく、自由主義内の論争の中国における反映という形で理解する視点もあるのではないかということである。

『『左派』と『右派』の第一次分化に続き、自由主義内部に第二次分化（『左派』自由主義＜新自由主義、社会民主主義＞学者と『右派』自由主義＜古典自由主義＞学者）が起こった」⁽¹⁹⁾といった指摘はこのような見解を示したものといえるであろう。

自由放任に対する批判がソ連・東欧の社会主義解体後の状況との関連で提起される傾向もある。たとえば、甘陽は「『改革』の目標は『自由放任資本主義』へ向かうことではない。ロシア的な寡頭成金資本主義へ向かうことを回避しな

ければならず、改革の目標は政治、経済民主を拡大する方式で市場、国家と社会の間の相対的バランス・メカニズムを実現し、社会分配の相対的公平を保証して、貧富の格差の無限の拡大を回避することでなければならない⁽²⁰⁾と指摘している。

既述のような「第二次分化」における「左派」と「右派」の対立を自由主義内部の論争とする見解によれば、「中国の知識界の現在の自由主義に対する批判は、しばしば自由主義に対する自己反省と批判および内部の論争と相互批判にもとづいているが」、これは自由主義の「活力の表現」⁽²¹⁾、ということになる。

新左派から自由主義に対する批判を任劍濤の整理によって示せば、「新左派から自由主義への批判」の第一は「自由主義の内容の曖昧さ」である。しかし、前述のように、自由主義の多様性をすべて包含するとすれば、内容のあいまいさは包含する領域の広さを意味しているのであって、どのような自由主義のどのような面であるかを明らかにすることによってある部分の問題は解決することが考えられる。第二は「自由主義の実践の欠陥性」である。「彼らは自由主義の憲政制度の実践が国民国家内部で一連の社会不公平を作り出し、しかも、権勢をもつ者の利益にしか着眼せず、国際社会では覇権主義の傾向をもち、後続国家から搾取する。一部の重要な問題でこれらの批判は道理がないわけではない。権利と正義は現代自由主義の両翼として、政治実践において少なからぬ難題にぶつかっている」。第三は「自由主義の前途の暗さ」である。「彼らは自由主義の現代構造は『支えきれなく』なっており、自由主義に対する社群主義（以下、コミュニタリアニズム）の批判が、自由主義に代わって公平社会の主導的思想になる趨勢をもつ」と考えるのである⁽²²⁾。

しかし、コミュニタリアニズムが中国に紹介された状況に関連して、次のような指摘がある。中国では「自由主義が受けている『挑戦』、置かれている『困難な状況』、『危機』」が強調され、「当代西洋政治哲学の基本状況と主要な特徴はコミュニタリアニズムが自由主義に取って代わった」という印象を与えやすいものだった⁽²³⁾。任は「個人を起点とする自由主義の権利哲学と正義哲学は、

コミュニタリアニズム問題に対してずっと弱勢にある」ので、局部的理論問題でのもっともな批判に道理がないわけではないと認めている⁽²⁴⁾。

古典自由主義、古典社会民主主義の最低ラインを確認することによって共通性が見えてくる。秦暉の「共通底線論」は基本的には各主義に共通する「底線」すなわち「最低ライン」を見定めながら、中国の現実的環境における自由主義と社会民主主義の基本的な価値の重なり合う部分に注目する議論を展開している。

秦によれば、「自由の秩序が打ち立てられる前の時代には古典自由主義と古典社会民主主義の価値が重なり合う面は大きく、共に民粹主義、専制主義という反自由主義的、反社会民主的価値に対処し、自由主義が賛同し社会民主派が反対する価値と社会民主派が賛同し自由主義が反対する価値という2つの部分は小さかった。ここでのいう価値が重なり合う面とは主として公民の権利、自由と手続きの正義である」⁽²⁵⁾。

これらの価値が自由主義と社会民主主義の共通の底線となる。秦によれば、この重複領域は「2つの主義『の間』にある『第三』の立場」ではない⁽²⁶⁾。

「自由秩序が打ち立てられるのに伴い、古典自由主義と古典社会民主主義の価値が重なり合う部分は縮小し、両者の価値が分かれ、観点が対立する部分が拡大し、同時に両主義の共通の敵としての価値（民粹主義と専制主義）も徐々に歴史の舞台を退いた」⁽²⁷⁾。

かくして、秦暉によれば「現在の中国に存在するのは古典自由主義と古典社会民主主義が共同で堅持する価値と、民粹主義、専制主義との間の対立」である。このような状況下で、古典自由主義の立場の堅持を提起している⁽²⁸⁾。

ここでは古典自由主義と古典社会民主主義が比較されているが、古典自由主義と新自由主義を比較する観点も出ている。任劍濤によれば、「古典自由主義と新自由主義の間にどちらが優先するかという中国自由主義思想の問題が生まれた」⁽²⁹⁾のである。

「新自由主義と、社会民主主義、社会主義の一部の主張の融合」に関して、任は次のように述べている。「①現実社会の政治生活問題を観察する際に、『公正』に対する偏愛が個人の自由に対する重視を超えている、②ルールズに対する関心が古典自由主義理論（ハイエク、ノズコウィック）への関心より強い、③社会不公平に対する批判が憲政制度建設に対する関心より強い、④新自由主義が自由と公平という2つの面に関心をもっていることに対する評価が、自由を得て、自由を守るという最低条件を超えているので、古典自由主義を過激な政治思想を見なす。しかも、彼らは経済（学）の自由主義と政治（学）の自由主義をはっきりと分ける基礎の上に、最低ラインの権利の自由を上限の社会公正の背後に移し、『公正至上』の社会要求の優越性と緊迫性を突出させた」⁽³⁰⁾。

任の関心は「新自由主義者がなぜ自由に対する古典自由主義の極端な重視という最低限のラインから、社会の公平に対する新自由主義者の極端な重視へと一足飛びに変わったのか」という点である。「なぜ彼らは権利に対する古典自由主義の強調を重視しないばかりか、欠陥と見なすのか」。彼らが新自由主義を支持する理由は、「①現実において、中国では改革開放以来、深刻な社会不公正が生じている」こと、「②理論上、新自由主義の理論は古典自由主義に比べてずっと健全である」こと、「③中国の自由主義の伝統は、変遷する社会情勢にある中国に合う新自由主義の伝統である」ことである。任によれば、「現在の中国の社会の局面と公衆の社会政治の認知状況から見て、新自由主義は古典自由主義より中国人に理解され受け入れられやすい。つまり、『社会公正』と『学術的良心』を結び付けているのである」⁽³¹⁾。

実は自由主義、新自由主義、社会民主主義に対する検討はそのいずれかに重きをおく論者もいるが、それぞれ背景をもつこれらの思潮が現在の中国においていかに重なり合い、共通の問題を前に類似するアプローチを見せるかといった点が注目されるのである。それは単なる折衷とは違い、それぞれの思潮が現実とのかかわりによっていかに変化しうるかといったことを見据えての考察なのである。このような点に着目してみれば、この論文が述べているのは、古典

自由主義よりも新自由主義あるいは社会民主主義に対してなぜ中国では共感が集まりやすいのか、その背景と理由であることがわかる。論争の一方である自由主義を古典自由主義とするのか、新自由主義とするのかによって、様相は変化するが、この理由の説明は、現在の中国の状況では潜在的にどのような見解に立つことが有利であるかを示したものといえるかもしれない。

2. 新左派をめぐる

自由主義について、発展のどの段階を以て自由主義のもっとも特徴的な部分を見出すかが論者によって異なるように、新左派についても、その理論のどの部分をもっとも特徴的なものとするかについては、自由主義以上に広がりをもつ。

また、自由主義について「歴史的に不足していた要素」という視点から論じることができるのであれば、左派思想については「歴史的に、とくに近代以後、過分の要素」という視点から論じることでも可能ではないだろうか。これは「急進性」として顕現した「左派思想」についてだが、「急進性」の根源が何であるかは議論の余地があるところである。また、現在の「新左派」がこの問題にどのような立場をとっているかはさらに検討の必要がある。

新左派については、中国の旧左派との違いを意識する共通性は見出せるものの、それぞれの思想の本国における位置と中国に移し変えた場合の乖離はかなり複雑な問題を惹起しうる。

この問題について、羅崗は次のように述べている。「中国の『新左翼』が現在直面している問題は西洋の問題とは異なり、とくにコンテキストにおいて相当大きな違いがある。たとえば、ジェイムソンはマルクス主義を資本主義の批判システムとみなし、資本主義が存在するかぎり、マルクス主義は一定の活力をもつと考えている。だが、中国の新マルクス主義者とジェイムソンが異なるのは、中国ではマルクス主義あるいは社会主義は自分たちを取り巻く環境なのである。社会主義、マルクス主義の合理性、合法性を強調するとき、そのよう

な立場と中国伝統の社会主義、中国のイデオロギーの主流としてのマルクス主義との関係をいかに処理するかという岐路に立つ」⁽³²⁾。

「文化大革命」期はもとより、大陸は長期にわたって「極左」社会だった。中国の改革はそこからの脱却を目指してスタートした面があり、「反左」を出発点としていた。そこで、「大陸では『左』は絶対的にマイナス・イメージをもち、『反左』が最高の道徳正当性をもつ」⁽³³⁾という側面がある。この傾向は改革・開放推進過程でとくに顕著だった。

新左派とは旧左派に対する相対的存在であり、「(1)「旧左派＝党内保守派、新左派＝青年知識分子」；(2)旧左派＝伝統的マルクス・レーニン主義言語を使う。新左派＝西洋人文社会科学言語を使う」⁽³⁴⁾といった対比が見られた。

現代西洋国家におけるマルクス主義の変種としての「新マルクス主義」とは、1970年代以降、主として中国以外の学者によるもので、「彼らが理解するマルクス主義理論にもとづき、現代の発達した資本主義社会の政治の現実に対して下した新たな理論解釈モデル」⁽³⁵⁾である。中国の新左派は新マルクス主義だけではなく、社会民主主義のほか、ポストモダニズムなども包摂するのか。また、中国の土壌に根差した新左派という場合、1949年以降の人民公社や文化大革命はどのように取り扱われるのか、といった、現実の政治とかかわりをもつ部分が問題になる。

1990年代に中国の学者たちが自分たちの方法で西洋マルクス主義を取り入れつつ形成してきたのが「新左派」であるといえようが、これは国外からの視点で中国内部にも移動してきたことを示すといえるかもしれない。(甘陽は、「97年以前は海外に留学して中国の国情を忘れてしまったために新左派になったといわれたが、97年以後は長期間大陸にいた人も新左派に変わった」と述べている⁽³⁶⁾。)

ここにも多くの要素が混在し、論者における差異に留意する必要がある。たとえば、左派陣営を「旧左」(スターリン主義)、「中左」(毛主義。中間派における左派あるいは左派における中間派)、「新左」(新マルクス主義)に分けた

王思睿は、「新左」と、「西左」、「中左」の違いは、「(新左には)擁護しなければならない、いかなる特定の制度、階級、利益も存在しない」ことだと述べているが、それだけに、「進歩に対する信念、現代化に対する承諾、民族主義の歴史使命、自由平等の大同未来」などに疑いが向けられ、「徹底的な構造解体」がなければよしとしないような面がある⁽³⁷⁾。そして、王によれば「新左」の矛先は支配層や強力な勢力ではなく、生まれたばかりの中国自由主義に向けられたのだった⁽³⁸⁾。

秦暉によれば、欧米の流行語「新左派」とは、90年代に流行した「社会自由主義」だが、「90年代に崔之元らが提唱した『新左派』の立場は実際には中国のもととのスターリン体制と西洋の社会民主主義の間の折衷」⁽³⁹⁾である。

「彼らは『人民公社』を経済民主の手本、『文革』は政治民主の手本と考え、改革以前の体制から資源を吸収しようとした」ものとする。「彼らが吸収している思想資源の多くの部分は社会民主主義ではなく、西洋の『西洋マルクス主義』、『新マルクス主義』から来ている」。「この思潮は社会民主思潮と大きく異なるが、多くの中国人は両者がほとんど同じだと誤認している」⁽⁴⁰⁾。

ここで留意しておかなくてはならないのは、一部論者が改革開放以前について部分的に評価の対象としていることである。「西洋マルクス主義」が「毛沢東式の主観的ロマンチズムに興味を感じたのは中国の現実と隔たりがあるためではなく、形而上の根源がある」というのが秦暉の分析で、「これらは欧米自由社会では批判的な声として価値をもつが、中国へ伝わると、スターリン体制との距離のほうが社会民主主義との距離より近くなってしまう」⁽⁴¹⁾ものと見なす。

おそらくこうした齟齬がとくに60年代後半から70年代半ば過ぎまで中国内部と海外の一部との間にできていたのである。「彼らの思想はスターリン体制と『西洋マルクス主義』の間にあり、スターリン体制と社会民主主義の間、ましてや社会民主主義と自由主義との間ではない。これが中国のコンテキストにおける『新左派』であり、西洋の『新左』と中国の『新左』が大きく異なるとい

う基本点を見出すことができる」⁽⁴²⁾。

自由主義の節で紹介したように、「新政自由主義」を「自由左派」と呼ぶとすると、中国の「新左派」の一部にはこれと異なる傾向が見られる。任隴は、甘陽や王紹光の定義を、「自由左派」は「新政自由主義 New Deal Liberalism」、
「自由右派」は「自由放任主義 Libertarian」ととらえたうえで、現在「新左派」と呼ばれる人たちの一部の主張がこれと異なる諸点を列挙している⁽⁴³⁾。

自由派内部の論争の枠からはみ出す部分があるということは中国式新左派が存在することを意味していることになるのだが、問題はこのような新左派を論争の一方として認識することが現在の政策をめぐる論議上有益かどうかということである。中国の新左派の少なくとも一部は「文化大革命」およびそれ以前の中国政治への郷愁的色彩を帯びており、このような「新左派」を論争の一方と見なすことは改革開放後、とくに90年代以降の状況の中でどれほどの意味をもつのかという問題提起が可能となるだろう。

李沢厚はいわゆる「新左派」を「民粹派（あるいは民粹主義）」と呼び、「彼らは群体（大多数の民衆）の利益すなわちまた社会正義を基石とし、資本社会の分配不公正、貧富の格差を示し、国際資本と全球一体化がもたらす深刻な災いを強調し、国民国家の対内的（経済関与など）、対外的（多国籍企業への抵抗など）積極機能を称賛する」⁽⁴⁴⁾と述べている。ここに分類されているような「民粹派」も存在するが、以前の価値観への再評価をも射程に入れた一部新左派も存在するのである。

3. 李沢厚の「4つの順序説」

新左派と自由主義の論争に関連して李沢厚が提起した「四つの順序説」について触れておきたい。「四つの順序」とは「経済発展－個人の自由－社会正義－政治の民主」の各段階である。李によれば、「経済発展の後に個人の自由があり、個人の自由の前提の下で社会正義を語ることができ、最後がようやく政治も民主」であり、「この4つの大きな問題の中国近代化の過程における関係

をいかに処理するかはきわめて重要である」。李は「この4つの面をはっきりと分かれる歴史段階とはみなさないが、相互に浸透し、密接に関連しつつ、軽重緩急の前後の順序に分けることができる」⁽⁴⁵⁾と考えている。

李によれば、「この『順序説』は両派およびその他の方面から攻撃されている」とのことであり、「とくに、『経済発展』を首位に置き、『政治の民主』を最後に置いたことは」、「自由派からは『専制を擁護するもの』と批判され、新左派からは『人民に背くもの』と批判された」⁽⁴⁶⁾という。

李はこれらの批判に同意しないことを表明し、「直ちに議会制、普選制およびその理論的基礎である原子的個人など」を主張する自由派にも賛成しない、と述べている。李は「現在中国で必要なのは自由であり、自由は民主の基礎だが、経済発展があってこそ真に人々に自由をもたらすことができる」ので、「『発展は絶対的な道理である』という言い方を評価している」⁽⁴⁷⁾。

一方、「『社会正義こそ絶対的な道理だ』という人もいるが、階級闘争を再度提起し逆戻りする危険性をもつので、私は同意しない」と言い、「社会正義を首位に置くことにも、政治の民主を首位に置くことにも同意しない」⁽⁴⁸⁾と表明する。

「経済を発展させるとの大きな前提のもとで労使協力、階級協調の提唱と国家の福祉政策によって社会正義の問題を解決、緩和することは、論理上、必然的に階級闘争の呼びかけとプロレタリア階級の全面的な独裁を招く貧富の差と社会の不公平を触れ回るよりずっとましである」⁽⁴⁹⁾。李は「中国の各方面では批判だけではなく、建設的な理論が必要だ」⁽⁵⁰⁾と訴えている。

社会正義の問題を根本的に一挙に解決することを呼びかけるのと、社会上さまざまな不正を緩和、是正する道を探ることのどちらを優先させるべきか。この論争について、両者の主張を組み合わせる種の融合を図るのは、理論上はそれほど難しいことではない。しかし、だからこそ、それが観念論に終始する恐れがあり、論争が結局は実際問題と接点をもちにくいということを反面から示すことになりかねない。現実の論争と並行して、過去の中国の政策、思

想を検証し、再度評価していく作業が進められてきているはずである。その意味ではこの論争が1つの契機となって経済発展の重要性と、それに伴う諸問題の重要性を認識し、それらの新しい問題を法律的に、制度的に処理する方向性と密接に関連しているかに見える。いわば、思想がむき出しで争点になることを回避する措置が講じられ始めているのである。中国では改革開放以来、実践を理論的にどのように整理するのか、という問題がたえず現れてきた。現実先行型であり、理論上整合性のある説明をするよりも先に現実が先行してきた面があった。過去の理論が生み出された背景とは異なる環境でいくつかのレベルの問題が同時に起こっている。「個人の自由」が問われるという第一段階にあると同時に、「個人の自由」が自由主義の中でさまざまな視点から検討しなおされている段階で生じる問題にも同様に対処する必要がある。その意味では、「自由主義的社会主義」は中国の現段階においてある程度の現実味は帯びているともいえよう。以上のように問題を設定するとすれば、中国においては第二の段階から出発しているということもでき、第一段階で扱うべき問題があるとするれば、その理論的基礎である自由主義によって補足するという面が出てくるはずである。しかし、それでも旧来の体制を維持してきた理論との緊張関係ないしは摩擦はやはり存在するのであり、その部分がそのままの形で存在する限り、実際には一部知識分子たちの議論の範囲内の事柄に納まったままでいるといえるのかもしれない。

4. その後の状況：2003年中国－SARSの影響 有限政府と有効政府

2003年の中国では何とんでもSARSが大きな出来事だった。SARSに関連して、衛生面はもとより、データの信憑性、情報の公開を含め、さまざまな課題が中国に集中的に突きつけられる格好となった。SARSへの対応過程で透明性の必要が説かれ、政治が浮かび上がる局面が何度もあった。

たとえば、3月に全国人民代表大会が開かれたことから、SARSが深刻な状況だったにもかかわらず、会期中にSARS関連のニュースが出ることを防ごう

としたのではないか、との報道もあった。実際にどのような形で決定がなされたかは不明だが、時期的にはまさに重なり合っていた。中国においてまだ情報公開の度合いが低いといった次元の問題とは別に、中国の政治に関してこの時点での限界を示すものだったといえよう。その後、隠蔽を暴露し、事態ははるかに深刻であることを海外のメディアに発表した元医師の告発が話題を呼び、事態の推移の中で衛生相と北京市長が解任され、中国におけるSARSへの対応の面で1つの大きな契機となったことは記憶に新しい。

SARSへの対応は、自由主義と新左派による観点、立場の違いがはっきりと出る性質のものではなかったとはいえるものの、実はSARSは政府に望む役割に関して微妙な影響を及ぼしたことも否定できない。つまり、政府の役割に対する要求が強まり、従来の議論の根本に影響しかねないという側面である。それは切迫した状況が出現したことの反映でもあった。SARSをめぐる2003年の中国の動きの中で、政府の作用に関するさまざまな思考が促されたであろうことは想像に難くないが、それがどの程度政治乃至政治制度に向けての議論に影響するかは限定的なものであろう。

ここで、とくに2000年以降、論じられることの多い「有効政府」という考え方を紹介しておこう。前回の論文では「有限政府」に言及したが、「有限政府」は政府の関与を少なくする古典自由主義的方向である。ただし、そこには、「関与」が多すぎる政府に対する批判が寓意として込められており、この主張もそのような背景に留意して読む必要はあるだろう。「有限政府」はいわゆる「小さな政府」とはやや異なる。「有限」とは「無限」に対する概念で、政府の機能が拡大することを抑えようとする点に重点があるとも受け取られ、たとえば、政府が行ってきたことを民間に移行させるといったこととは異質の視点から問題が設定されているのである。

これに対して「有効政府」の概念は、「ますます多くの改革者が（10年間の政府縮小の実験の後）有能な政府をもつことの極端な重要性をようやく認識している。もし民主を有効に作用させ、その作用を打ち固めようとするなら、最

小の政府をもつだけでははるかに不十分である」⁽⁵¹⁾という認識を基本にしている。王紹光らによれば、「中国の発展が現在直面している問題について言えば、個人の自由の拡大、公民社会の推進、民主プロセス加速は疑いなく重要だが、その中のある種の問題を解決することしかできない」のであって、「大量の社会、経済、政治、法治面の問題は国家制度の確立と整備によって初めて可能となる」のであり、「民主制度そのものも、結局のところ、一種の公共権威、一種の国家制度である」と断定する⁽⁵²⁾。

王紹光らの主張は、自由主義対新左派の対立でも、政府に有限性を求めるのか、戦略的関与を求めるのかの二者択一でもなく、民主的で強固な政府の確立の必要性が政府の有限性を強調するより重要だという視点を示しているのである。

中国における議論をそのまま自由主義と保守主義をめぐる議論に置き換えるには限界があり、むしろより素朴に「どのような政府を求めるか」、「政府の役割として何を期待するのか」という形で議論を理解するほうが、この論争を中国の現実にも即した形で理解する一助となるのではないか。

そしてこのように見た場合、中国の現実にもとづく現在の争点は自由主義対新左派という対立ではなく、自由主義内部の対立でもなく、自由主義、社会民主主義等の「重複領域」の確認であり、ここから次の段階が展望できるのではないかと思う。

注

- (1) 任劍濤「古典主義与新自由主義之間－当代中国自由主義的理論定位問題」《中国政治網》(www.cp.org.cn/pool/zgdzyyxz.htm)
- (2)-(4) 徐友漁「新世紀対自由主義的重新闡釈」徐友漁《自由的言説》(長春出版社 1999年12月) 276頁。
- (5) 甘陽「中国自由左派の由来」公羊 主編《思潮 中国“新左派”及其影響》(中国社会科学出版社 2003年7月) 113-114頁。
- (6) 任蹟「中国的“新左派”是“自由左派”嗎？」公羊 主編《思潮 中国“新左派”及其影響》(中国社会科学出版社 2003年7月) 326頁。

- (7) 李沢厚『歴史本体論』(生活・読書・新知 三聯書店 2003年) 149-150頁。
- (8)(9) 徐友漁「新世紀對自由主義的重新闡釋」徐友漁《自由的言說》(長春出版社 1999年 12月) 279頁。
- (10)(11) 甘陽「中國自由左派的由來」公羊 主編《思潮 中國“新左派”及其影響》(中國社會科學出版社 2003年 7月) 111頁。
- (12) 秦暉「自由主義、社會民主主義與當代中國“問題”」公羊 主編《思潮 中國“新左派”及其影響》(中國社會科學出版社 2003年 7月) 382-383頁。
- (13) 劉軍寧「保守主義與自由主義之間－從哈耶克(ハイエク)到中國」李世濤主編《知識分子立場－自由主義之爭與中國思想界的分化》(時代文藝出版社 2000年 1月) 498頁。
- (14) 劉軍寧「保守主義與自由主義之間－從哈耶克到中國」李世濤主編《知識分子立場－自由主義之爭與中國思想界的分化》(時代文藝出版社 2000年 1月) 500頁。
- (15) 劉軍寧「保守主義與自由主義之間－從哈耶克到中國」李世濤主編《知識分子立場－自由主義之爭與中國思想界的分化》(時代文藝出版社 2000年 1月) 503頁。
- (16) 劉軍寧《保守主義》(中國社會科學出版社 1998年) 256頁。
- (17) 劉軍寧「保守主義與自由主義之間－從哈耶克到中國」李世濤主編《知識分子立場－自由主義之爭與中國思想界的分化》(時代文藝出版社 2000年 1月) 504頁。
- (18) 徐友漁「重新理解“自由主義－社群主義(コミュニタリアニズム)”之爭」《中國政治網》(www.ccrs.org.cn/2233)
- (19) 任劍濤「古典主義與新自由主義之間－當代中國自由主義的理論定位問題」《中國政治網》(www.cp.org.cn/pool/zgdzyyxz.htm)
- (20) 甘陽「中國自由左派的由來」公羊 主編《思潮 中國“新左派”及其影響》(中國社會科學出版社 2003年 7月) 115頁。
- (21) 徐友漁「新世紀對自由主義的重新闡釋」徐友漁《自由的言說》(長春出版社 1999年 12月) 277頁。
- (22) 任劍濤「古典主義與新自由主義之間－當代中國自由主義的理論定位問題」《中國政治網》(www.cp.org.cn/pool/zgdzyyxz.htm)
- (23) 徐友漁「重新理解“自由主義－社群主義”之爭」《中國政治網》(www.ccrs.org.cn/2233)
- (24) 任劍濤「古典主義與新自由主義之間－當代中國自由主義的理論定位問題」《中國政治網》(www.cp.org.cn/pool/zgdzyyxz.htm)
- (25)(26) 秦暉「自由主義、社會民主主義與當代中國“問題”」公羊 主編《思潮 中國“新左派”及其影響》(中國社會科學出版社 2003年 7月) 384頁。
- (27) 秦暉「自由主義、社會民主主義與當代中國“問題”」公羊 主編《思潮 中國“新左派”及其影響》(中國社會科學出版社 2003年 7月) 385頁。
- (28) 秦暉「自由主義、社會民主主義與當代中國“問題”」公羊 主編《思潮 中國“新左派”及其影響》(中國社會科學出版社 2003年 7月) 387頁。
- (29)-(31) 任劍濤「古典主義與新自由主義之間－當代中國自由主義的理論定位問題」《中國政

治網》(www.cp.org.cn/pool/zgdzyyz.htm)

- (32) 許紀霖 劉擎 羅崗 薛毅「尋求『第三條道路』－關於『自由主義』与『新左翼』的對話」李世濤主編《知識分子立場－自由主義之爭与中国思想界的分化》(時代文芸出版社 2000年1月) 327頁。
- (33)(34) 甘陽「中国自由左派の由来」公羊 主編《思潮 中国“新左派”及其影響》(中国社会科学出版社 2003年7月) 110頁。
- (35) 俞可平「当代政治理論的主要流派」《中国政治網》(www.cp.org.cn/2233/)
- (36) 甘陽「中国自由左派の由来」公羊 主編《思潮 中国“新左派”及其影響》(中国社会科学出版社 2003年7月) 110頁。
- (37) 王思睿「今日中国的左派光譜」公羊 主編《思潮 中国“新左派”及其影響》(中国社会科学出版社 2003年7月) 297頁。
- (38) 王思睿「今日中国的左派光譜」公羊 主編《思潮 中国“新左派”及其影響》(中国社会科学出版社 2003年7月) 298頁。
- (39)(40) 秦暉「自由主義、社会民主主義与当代中国“問題”」公羊 主編《思潮 中国“新左派”及其影響》(中国社会科学出版社 2003年7月) 383頁。
- (41) 秦暉「自由主義、社会民主主義与当代中国“問題”」公羊 主編《思潮 中国“新左派”及其影響》(中国社会科学出版社 2003年7月) 383-384頁。
- (42) 秦暉「自由主義、社会民主主義与当代中国“問題”」公羊 主編《思潮 中国“新左派”及其影響》(中国社会科学出版社 2003年7月) 384頁。
- (43) 任蹟「中国的“新左派”是“自由左派”嗎？」公羊 主編《思潮 中国“新左派”及其影響》(中国社会科学出版社 2003年7月)
- (44) 李沢厚『歴史本体論』(生活・読書・新知 三聯書店 2003年5月) 224頁。
- (45)-(50) 李沢厚「四期儒学、後現代主義(ポストモダニズム)及新左派－訪李沢厚」《人民書城》(www.booker.com.cn/gb/paper23/4/class002300003/hwz25346.htm)
- (51) 王紹光「有効政府与民主」胡鞍鋼、王紹光、周建明《第二次轉型 国家制度建設》(清華大学出版社 2003年7月) 315頁。
- (52) 王紹光、胡鞍鋼、周建明「第二代改革戰略：積極推進国家制度建設」《戰略与管理》(2003年2期) 94頁。